

ずるに用ゐられて居つたものであることは、これを證明するに決して難くは無い。漢代以後、天山南路を経て支那と西方とを結びつける交通貿易の道筋と、大體において並行するこの天山北路の道筋こそ、こゝに見たる西方の美術工藝を、東方蒙古の地方に導くに至つたものに相違ない。天山南路の東西交通の大幹線から分ぎして外蒙古に入つたものもあることはもちろん否まないが、そのみではこゝに見たサイソ・シベリヤ式美術の流れの、外蒙古におよんで居るのを説明することは出来ない。シベリヤ地方に存する同種の遺物の分布は、寧ろこの天山北方を通ずる交通線から分ぎした往來の結果と考へるのが適當ではあるまいかと思ふ。

かく見る以上、この交通に由る文明の流傳は、それが獨り外蒙古の地に止る譯はなく、更にこれが南に下つて支那におよんだこと、かの戰國時代から支那に行はれた服裝、いはゆる胡服において、西方との間に相通ずる服飾を有するものあるによりても認められ、また同様に蒙古から東に向つて北滿地方にもおよび、それが南に轉じて朝鮮半島にも波及したと考へて見なければならぬ。朝鮮出土の古代の工藝品、例へば慶州の古ふんなどから出る鍔帶の類において、遙に西北アジア地方出土のものと同脈絡を有せねばならぬと考へらるゝものゝあるのは、支那を通じての相關とも説明されやうが、むしろこの系統に歸すべき現象かと思ふ。朝鮮半島の土俗言語の上などにはその政治的の方面と共に、從來の研究のおよんで居る以上に、北方からの勢力を顧慮せねばならぬはずである。



コ氏の發掘の詳細を知ることには更に後日を期せねばならぬ。單にその中の美術の方面の、それも一部分の資料からだけでも、考究に價する事柄は極めて多い。早く詳細の報告に接したいものである。